

こんにちは！歴史資料室の鈴木です。朝夕すっかり肌寒くなりましたね。

現在、歴史資料室では次回の館内展示の準備を進めています。そこで先週に引き続き、今回も図書館にまつわる話題をご紹介します。

さて、以前にもご紹介した一戸岳逸が運営していた「青森通俗図書館」は、大正7年（1918）9月1日に市内4つの小学校に巡回文庫を配置する児童図書館としてスタートしました（「あおもり歴史トリビア」No.154）。そして、同年12月には現在の市役所東側付近にあった自宅を本館事務所として大人向けの通俗部を設け、大正9年7月17日からは通俗図書館と改称して、子どもから大人までを対象とする図書館を運営するようになりました。



青森通俗図書館
（昭和11年発行「都市計画 青森市街全図」、
歴史資料室蔵）

しかし、本館では年々増える蔵書の保管が大変だったようです。通俗図書館となる直前の大正9年6月27日現在の蔵書数は総計8,439冊でしたが、その4年半後の大正14年1月には17,849冊と2倍以上にもなっていました。

その大正14年に、古川にあった青森市立図書館が橋本に移転し、図書館の建物（元帝室林野管理局青森支庁舎）と倉庫を市が払い下げることになりました。一方、ちょうどこの頃、通俗図書館では書庫の建築を計画していたため、一戸はこの倉庫を買い受けて移築し、鉄網コンクリート3階造りに改造することにしました。

この件に関する議案を青森市会に提出した鈴木助役は、一戸について、「家族も居る閲覧人も入るといふ狭い処に数年前より通俗図書館を開いてるし、閲覧人も現在では1日150人位ある、図書も2万に近い数に達して困っているし」「兎に角年々千余円の経費をかけて通俗図書館を運営している人であるから、人格を認めて提案した」と話しています。



苫米地義三
（『苫米地義三回顧録』、
国立国会図書館
ホームページより）

その後、昭和14年（1939）8月に一戸が亡くなり通俗図書館は閉館してしまいましたが、青森県中央図書館（現青森県立図書館）に併設して昭和16年6月に開館した青森県郷土博物館の建物に、通俗図書館の倉庫が再利用されることになりました。

この倉庫について、昭和16年版『東奥年鑑』に「通俗図書館附属倉庫（元帝室林野局支庁倉庫）」と書かれていますので、おそらく古川から移築された元市立図書館の倉庫のことだろうと思います。これを苫米地義三という人物が購入して県立博物館用建物として県に寄付し、現在の県庁北棟の場所にあった青森県中央図書館裏手に移築されたのでした。

しかし、昭和20年7月の青森空襲でこの建物も残念ながら焼失してしまいました。